

倫理法人会で、純粹倫理を学ぶための基本テキストである『万人幸福の栞』において、次のような文章があります。

折角なつた病気を、ただそれだけとして直しては惜しい、勿体ない。今や病気をこわがる、恐れる時代は過ぎた。(中略) 病気のお見舞に「それは結構です」という時代がきた。
(第七条 五八頁)

身体に不調をきたした時、その原因だけを探るのではなく、日常生活を振り返って、(病は自分の生活が良くなるための赤信号)と捉えます。その気づきによって、よりよい生活に改善していけるのです。

*

A氏は、建設業を営んでいます。これまでに、その手腕を遺憾なく發揮し、自社や周囲を動かしていました。大手企業で数年のキャリアを積んでから独立開業したため、自信をもって会社経営に臨みましたが、なかなか収益に結びつきませんでした。

朝から晩まで、身を粉にして働いても収益は上がり、経営の厳しさが身に染みていました。その影響は家庭にまで及び、妻とは顔を合わせれば喧嘩ばかりです。気の晴れないA氏は、壁やドアを叩き、穴を空けてしまうこともありました。

借金も膨れ上がり、夜逃げを覚悟しましたが、保証人である年老いた両親のことを思うと、踏み切ることができません。ちょうどその頃、右手から肩にかけて痛みを感じるようになり、整体や鍼灸の治療に通つ



生活のシグナルによって 自己変革を成し遂げる

ても、一向に良くなりませんでした。

そんな時に純粹倫理と出会い、経営者セミナーに参加するようになり、『万人幸福の栞』の内容に感動し、「これだ!」と感じたA氏は倫理指導を受けたのです。そこで、講師から言われたのは、「利き手の右手を仕事以外のことに使っていませんか?」という衝撃の一言でした。

A氏は、自身の生活を見透かされたかのように感じました。自分の驕りから事業不振を招き、それを心配して支えようとしてくれていた妻の気持ちを汲んでいませんでした。それどころかイライラをぶつけていた言動を反省し、涙ながらに詫言いました。妻も「あなたに辛い思いをさせていた。涙を流させてごめんさい」と許してくれたのでした。夫婦の心が通い合った翌朝、一年近くも治らなかつた原因不明の右腕の痛みが、ピタッと治まっていったのです。

A氏は商売道具でもあつた右腕の痛みと共に、慢心も一緒に捨てることができ、以前よりも懸命に働くようになりました。

やがて、夜逃げを覚悟するまで膨れた借金の完済も成し遂げました。さらには、楽しそうに仕事をしているA氏を見て、腕利きの職人数名から「是非雇ってほしい」と言われる会社にも発展したのです。

右腕の痛みという「赤信号」をしつかりと捉えたことで、経営者として、夫として本来の役割を取り戻すことができたA氏。現在、事業は順調で、家庭内にも、良い影響を及ぼしていることを自覚しています。